

図書館情報学橋会会報 第23号(通号29号)

2018年3月発行

発行者 図書館情報学橋会

素晴らしき先輩達の心意気を繋いでいきたい 17

図情大からシステム系企業に就職した開拓者 川本清文さんのこと

図書館情報学橋会会長 森 茜

天久保の大講堂で行われる筑波大学全体の卒業式には「筑波大同窓会ウェブサイト」掲載の全同窓会が招待される。昨年、その卒業式に参加して、感慨を深くしたことがある。学部と大学院の卒業生の数の比だ。2017年3月の卒業生は、学群生が2234人、大学院生が2163人だった。学群卒業生と大学院卒業生の数がほぼ同数だ。大学院卒業生は修士と博士があるから、単純には言えないが、学群卒業生の半数以上が大学院に進学していることを示唆している。

知識情報・図書館学類の卒業後の進路は、同学類のWEBページに毎年詳しく紹介されている。それによれば、約3分の1が大学院進学で、約半数が企業への就職だ。図書館・公務員は3分の1に過ぎない。企業の種類は、実にバラエティに富んでおり、この学類の卒業生たちが、知識情報や図書館学の基礎である情報学の知識や技術を基に、社会のあらゆる分野に進出していることがよくわかる。

考えてみれば、図書館の基本は“もの(図書=複雑な内容をもつ事物)と情報(分類や目録=記号処理)”を結びつける点で、“IOT”そのものなのだ。だから、今、この時代、この学類の卒業生たちの進路が、社会のあらゆる分野に広がるのは当然のことなのだ。社会全体の“IOT”化が進む中、この学類が育てる人材は、社会全体の需要の中にある。

1980年、旧来の図書館学と新しい情報学を融合することを使命として図書館情報大学が生まれたが、ようやくその実が結ばれる時代を迎えたのかと思う。

今回は、その先駆者の一人を紹介しよう。川本清文君という。彼は、1985年に図書館情報大学の第2期生として卒業し、東芝のエンジニアリング子会社である「東芝エンジニアリング」に入社。情報システム部門に配属された。新人教育終了と同時に、東芝本社駐在となり、東芝では、当時の最先端、C言語でのプログラム作成の毎日だったという。一からの勉強となり、学生時代に長谷部先生の実習をちゃんとやっ

ておけば良かったと後悔したと、笑う。

当時、ソフトウェア製造は属人的で職人技みたいなところがあり、通産省が「Σ計画」というプロジェクトを立ち上げ、ソフトウェア製造を工業化しようとしていた時代だ。東芝もそれにならない、「IMAP」というプロジェクトを立ち上げたが、彼は、その一員となった。川本君は、自分たちが作成したプログラムが部品となり、それを組み合わせて、システムを作成するというプロセスの中で、部品を検索するための方法を考えたり、プログラムを作成する時のルールを決めたりと、やるべきことは多かったが、創意と工夫に満ちた日常がとても刺激的で、大いに楽しかったという。

彼は、そのプロジェクトの中で初めて、ワークステーションに触れた。当時、システムへの入出力は、CUIという文字の入出力で、まったくグラフィカルではなかったが、それを可能にする(つまりGUI)コンピュータとして、東芝が米国から直接取り寄せたSun Microsystems製のワークステーションが浜松町に来た時は、画期的な製品でワクワクしたとのこと。

1991年ワークステーションでファイリングシステムを構築するプロジェクトを任せられ、図面や地図をスキャナで取り込み、保管・検索するシステムの開発に従事し、この仕事で、ほぼ日本中を回ったそうだ。1995年会社から英国へ語学留学する機会を得た。この年は、阪神大震災、地下鉄サリン事件、また長女の誕生等、非常に印象深い年だったという。語学力を買われて、ITコンサルタントとして、お客様のシステム構築の手伝いをしていたが、それがきっかけで、2000年Sun Microsystemsに転職したとのこと。これが、彼が外資系企業で働き始めた最初だ。2010年Sun Microsystemsが、Oracleに買収され、Oracleの社員となった。川本君は、今年、外資系企業で18年目になるが、新しいテクノロジーに触れる機会が多々あり、日々、刺激的な毎日を送っていると、澁刺と答えてくれた。

◇ 永年のご薫陶ありがとうございました ◇

平成 30 年 3 月をもって松本浩一先生がご定年となります。有難うございました。先生にはメッセージをご寄稿いただきました。

松本 浩一 教授 【専門】 中国史, 中国目録学

☆☆☆

38 年の経験から

筑波大学図書館情報メディア系教授 松本 浩一

筑波大学図書館情報メディア系の松本浩一です。12 月末に行った最終講義のタイトルを「38 年間いろいろやってきました」としましたが、38 年間とは就職してから退職までの時間です。

元来学生・院生を通じて研究テーマとして来たのは、道教特に儀礼の研究で、毎日ひたすら道教関係の文献に取り組んできました。しかし博士課程の 3 年目、急に筑波大学の学術情報処理センターに奉職することになりました。そもそも機械方面にはほとんど縁がなかった人間が、最新鋭の大型コンピュータの真っただ中におかれることになったのですから、突然エイリアンの世界に放り込まれたようなものでした。しかし少しずつ慣れていって、二年目に大学図書館の長期研修に来ていた人たちと、一緒に勉強することになったのですが、それがそもそも図書館情報学との出会いでした。彼らとともに、目録など図書館のコンピュータ化や、索引・抄録の話聞いて、これらの分野の最新の成果を、どのように文系の研究に生かしていくか、これが課せられた課題と思いました。図書館情報学では、情報組織化論講座に所属することになりました。そこで進められていた研究も最初は戸惑いましたが、その基本的な考え方は今でも大いに役立っています。

この 38 年でも、メディアの形態やサービスの環境はどんどん変わっていきました。文系に比べて、本当に変化の激しい分野だと思います。しかしメディアや手段が変わっても、資料・情報を必要としている人たちへのサービスという、図書館情報学を学んだ人たちの役割・目的は変化しておらず、よりよい利用環境を築いていくには、利用者と図書館員と

の協力体制が必要だと思います。院生時代にお世話になったある図書館員の方は、一院生にすぎなかった私に、どのようにしたらこれらの漢籍資料が探しやすくなるかと聞いてくれて、いくつか要望を指摘すると、直ちにその意見に沿って対処してくれました。その時の感激はいまだに忘れられません。図書館利用のルールを守らせることも結構ですが、やはり最後はこのような信頼関係が重要なのではないかと思います。

もう一つ持っていたきたいのは、プロとしての能力です。以前分類の演習を担当していた時、すでに図書館で書物の購入時には NDC の記号が付せられるようになったから、分類を学ぶ必要はないのではないかという学生がいました。資料が NDC に沿って並べられた図書館なら、それだけで OK だということのかもしれませんが、分類はあくまで手段で、目的は必要な主題に関する資料・情報にたどり着くことです。だからもしプロならば、利用者から「何々に関する資料はありますか」と言われたときに、直ちにその主題の資料が並んでいるところへ導く必要があります。そのためにはその主題が NDC ではどの記号になるか即座に変換でき、その記号が自分の図書館ではどこに並べられているか把握していなければなりません。しかしこれだけではプロとは言えません。その主題の図書が並べられているところへ行っても、利用者が満足のいく資料に出会えないことはしばしばあります。そのような時には、別の記号の可能性を提示できなくてははいけません。どの種類の仕事であっても、プロの能力を身に着け、発揮して行っていただきたいと思います。

☆ 同窓生の活動拝見 ☆

自著を語る：

『図書館と江戸時代の人びと』

新藤 透

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科
博士後期課程 2006 年修了

図書館に対して深い関心を持っていない一般の方に、図書館のイメージを聞くと「本・新聞・雑誌がたくさん置いてあって無料で借りることができる場所」という答えが多く返ってくると思います。図書館の役割は実は一定ではなく、歴史的に見るとかなり変遷してきました。紀元前に誕生した図書館は、現在の公文書館や保存書庫の機能も担っていました。どちらかという保存の観点が重視されていたと思います。それが近代に入り図書館蔵書の「利用」が重視されるようになります。わが国では 1970 年前後に、公共図書館は保存重視から利用重視に舵を切ったと考えられています。

では現在の図書館は、どのような役割を期待されているのでしょうか。1994 年 11 月に採択されたユネスコ公共図書館宣言には「公共図書館は、その利用者があらゆる種類の知識と情報をたやすく入手できるようにする、地域の情報センターである」と明記されています。つまり図書館は、「本」を大量に収集して無料で利用者に提供する「便利なところ」ではなく、情報を集積して市民に提供する施設なのです。紙の本が収集対象ではなく、その中に記されている情報を集めることなのです。ですから、収集対象の「本」が紙から電子媒体に移行したとしても、図書館は消滅することはありません。図書館はその姿・形を変えながら進化発展していくのです。

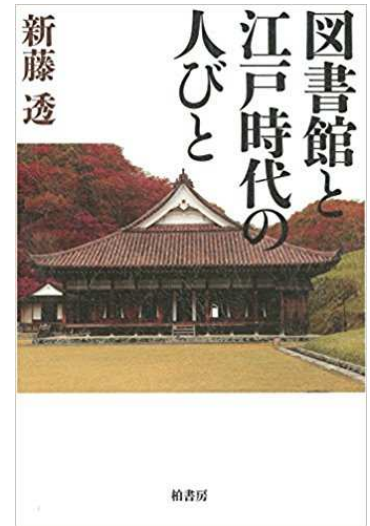
そこで、現在の日本図書館史は「情報の集積基地」・「情報センター」という視点で研究されているのか、といった疑問が浮かびました。司書課程の「図書・図書館史」の教科書を紐解けば、古代には芸亭、中世には金沢文庫、足利学校、近世は

紅葉山文庫、近現代は帝国図書館、東京市立図書館など…といったように、前近代では「文庫」、近現代では「図書館」の組織・施設の歴史のみが書かれています。そこに携わった人びとの「想い」や、書籍を中心とした人びとの情報・コミュニケーションの「流れ」についてはなにも触れられていません。

現代の図書館の定義で、新しい「図書館史」の本を書けないかと考えたのが本書の執筆動機です。それも専門家向けの「学術書」ではなく、一般の方向けの書籍に拘りました。筆者の研究成果だけでは内容が到底深まらないので、先学諸賢の研究を多く参考にしてなるべくわかりやすくまとめたつもりです。日本近世史の研究者には「常識」となっていることでも、図書館関係者や一般の方には新鮮な情報も紹介できたと思っています。日本は前近代にも、書物の「利用」を中心とした多様な情報・ネットワークが構築されていたのです。

(しんどう とおる、山形県立米沢女子短期大学
准教授)

書誌事項：図書館と江戸時代の人びと / 新藤透著。
-- 東京：柏書房，2017.8.



◆ 橘会会報やホームページにご寄稿ください ◆

同窓会・クラス会や、同窓会員・卒業生のみなさまの活動を、是非ご寄稿やご紹介ください。事務局にお気軽にお問い合わせください。

橘会事務局 E-mail info@tachibana-kai.com

「超高齢社会と図書館研究会」を紹介します

和知 剛（郡山女子大学図書館）

わたしが現在、運営委員を務めております「超高齢社会と図書館研究会」は呑海沙織・筑波大学図書館情報メディア系教授を会長として 2016 年に発足した、新しい団体です。ウェブサイト(1)に掲げるその理念を、まずご紹介します。

「図書館による高齢者を対象としたサービスにとどまらず、図書館という「場」を活用した世代間交流、高齢者の生きがい支援、高齢者の知恵や経験を生かした図書館サービス、認知症の人やその家族の居場所としての図書館、認知症への理解を深めるための普及・啓発など、超高齢社会における図書館のあり方をともに考え、話しあい、実践します。」

少子高齢化がすすむ中で、図書館では高齢者に対するサービスの基盤整備への支援と拡充が求められる状況が認められます。また、超高齢社会の亢進に伴う認知症患者の増加は、図書館サービスにこれまでとは異なる対応を迫るものとなっているケースが少なからずあるものと考えられます(2)。当研究会は超高齢社会に対応した図書館サービスの研究および実践に加えて、図書館分野以外の超高齢社会に関する専門家や当事者とも連携し、超高齢社会に求められている新たな図書館サービスを模索していくものです。

当研究会のロゴはこちらです。
ウェブサイトに掲載しているロゴの説明を引きます。

「私を忘れないで」「誠の愛」を花言葉にもつ「わすれな草」の花びらを新オレンジプランやオレンジリングにちなんだオレンジ色にして、開いた本の上にそっとのせました。」

当研究会のこれまでの活動として、次のものが挙げられます。この活動のいずれかに、すでにご参加いただいた同窓生もいらっしゃるかと思存します。

- 1) 研究会の開催 (2017年6月, 9月, 11月, 2018年1月)

- 2) 認知症専門家紹介制度の運用 (2017年9月より)
- 3) 認知症フレンドリージャパンサミット2017にて、「認知症にやさしい図書館ガイドライン」についてのセッションを開催 (2017年9月16日)
- 4) 2017年度全国図書館大会における特別セッション (第18分科会「認知症と図書館を考える～超高齢社会をともに生きるために～」) の開催 (2017年10月13日) (3)
- 5) 「認知症にやさしい図書館ガイドライン」第1版(3)の発行 (2017年10月) (4)
- 6) 認知症のための本の処方箋プロジェクト (2017年5月より)

「認知症にやさしい図書館ガイドライン」は、「認知症にやさしい」社会（「認知症にやさしい」社会は、またすべてのひとたちにとって住みやすい社会になっていくはずです）における図書館経営、サービスの指針を考え実践するための補助線となることを目指しています。現在、第1版が発行されていますが、みなさまからのご意見を伺いながら、今後改訂を続けていく予定です。

超高齢社会と図書館研究会へのみなさまのご理解とご協力、ご支援のほどよろしく願いいたします。

-
- (1) 超高齢社会と図書館研究会

<http://www.slis.tsukuba.ac.jp/~donkai.saori.fw/a-lib/index.html>

- (2) 現在の状況に関する詳細は以下の文献を参照してください。
国立国会図書館関西館図書館協力課, ed. 超高齢社会と図書館: 生きがいづくりから認知症支援まで. 国立国会図書館, 2017, (図書館調査研究レポート, 16).

- (3) この特別セッションはNHK教育テレビでも放送されました

NHK教育テレビ『TVシンポジウム「認知症にやさしい図書館～高齢化時代の新たな役割とは～」』(2018年1月20日放送)

- (4) <http://www.slis.tsukuba.ac.jp/~donkai.saori.fw/a-lib/guide01.pdf>

(橋会理事 わち つよし [大昭63])

図書館情報学橋会

〒305-8550 つくば市春日1-2 E-mail info@tachibana-kai.com
公式ホームページ <https://tachibana-kai.com/>
Facebook <https://www.facebook.com/lib.info.tachibanakai/>
発行: 2018年3月10日